

シリーズ「翻訳を考える」第五回

境界の文学——旅の詩学——

報告 久野量一

二〇一六年の秋から冬にかけて、同じ出版社から、(偶然にも)同じページ数の書物が刊行された。今号のレヴュー・コーナーでも紹介されている通り、イルマ・ラクーザ著、山口裕之訳による『ラングザマー——世界文学でたどる旅』と、和田忠彦による『タブツキをめぐる九つの断章』である。版元は「ひとり出版社」として注目されている〈共和国〉で、催し物のタイトルとして掲げられた「境界の文学」はこの二冊が収められた出版社のシリーズ名でもある。

年が明けて二月一日、二冊の刊行を記念する意味も込めつつ、十七時半から総合文化研究所で、山口裕之氏と和田忠彦氏には、ご自身がかかわった書物を出発点にしながら、自由にお話をいただいた。その後、それを踏まえ、松浦寿夫氏からお二人へのコメントをお願いした。山口氏は日本語へ翻訳するにあたっての背景から、主に「移動」の持つ意味合いについて身体、越境といったキーワードを出しながら語り、和田氏はイタリアの出版状況からタブツキにおける視覚芸術(絵画や映画)を中心に、タブツキ読解のヒントになりそうな要素を伝えてくれた。松浦氏は、山口氏の訳書のタイトルの語が比較級になっていることに焦点を当て、そこからヨーロッパの芸術論のトピックスを縦横に行き来しながら、二冊の書物の居場所を確認させて

くれた。

あの場にいたときも、またこれを書いている今も思うのだが、あの日、三人のお話を直に聞いた方は幸運というほかない。陳腐な言い方は避けなければいけないが、三人がそれぞれ、ドイツ、イタリア、フランスという地域をしっかりと足場としているのは当然としても、ヨーロッパの文化をしっかりと受け止め、そこに身を委ねながら、それでいてなお、適切な距離をとる構えのようなものに感銘を受けた。山口氏は「訳者あとがき」で「ここで『ラングザマー』で」語られているのは、本を読む、とりわけ文学を読むという特別な時間の経験であり、またそのような経験と重なり合って、寄り添うように世界をとらえる感覚である」と書いているが、三人の語りを聞くことはその特別な時間の経験だった。

書物が形になるまでには、当たり前のように前史がある。山口氏の場合には、二〇一三年のラクーザさんの来日で、和田氏の場合には、二〇一二年のタブツキとの唐突な別れである。それを起点として二人の仕事は動き出すのだが、しかし今回出版された本は通過点にすぎず、それぞれ次の仕事に向かっている。再びそれが形になるのを心から待ちたいと思う。